

おおかみと人

小川未明

青空文庫

未開みかいな小ちいさな村むらがありました。町まちへいくには、山やまのすそ野のを通とおらなければなりません。その間あいだはかかなり遠とおく三り里りもありまして、その間あいだには、一軒けんの人家じんかすらなかつたのであります。

春はるから夏なつにかけては、まことに景色けしきがようございましてけれども、秋あきの末すえから冬ふゆにかけては、まったくさびしゆうございました。けれど、その村むらの人ひとは、町まちまでいくには、どうしてもその高原こうげんを通とおらなければならなかつたのです。

この辺へんには、おおかみがときどき出でて、人間にんげんを食くつたことがあります。また、きつねがで出でて、人ひとをばかしたこともあります。冬ふゆになつて雪ゆきが降ふると、人々ひとびとは、一人ひとりでこの路みちを通とおることをおそれました。

村むらに獵かり人ゆうとどのおじいさんが住すんでいました。このおじいさんは、長年ながねん獵かり人ゆうとどをしていまして、鉄砲てつぽうを打うつことの大名だいめい人じんでありました。どんな飛とんでいる鳥とりも、走はしつていろうさぎも、またくまや、おおかみのような猛もう獣じゆうも、たいてい的まとをつけたものは、そらさず一発ぱつで打うち止とめるといふほど上じょう手ずでありました。

このおじいさんが日ひごろいつていますのには、

「くまや、おおかみのような猛獣は、かえつてやさしい情けがあるもんだ。昔から人間が谷に落ちてくまに助けられたり、また路に迷つて、おおかみにつれてきてもらつたりした話があるが、それはほんとうのことだ。」といつていました。

しかし、どのくまも、おおかみも、人間に害をしないというのではありません。そんな人を助けるといふようなことは、じつにまれな話であります。山や、野や、谷に食べるものがなくなつてしまうと、人間の村里を襲つてきます。そして、人間を食べたり、家畜を取つたりします。

この村の人々も、雪が積もると、おおかみや、くまに襲われることをおそれました。けれど、上手な猟人のおじいさんが住んでいるので、みなは、どれほど安心していたかしれません。ある年の冬には、三頭のくまが村を襲つてきましたのを、おじいさんは一人で打ち止めてしまつたからでありました。

同じ村に、与助という才走つた男が住んでいました。この男は、きわめて口先のうまい、他人の気をそらさぬので、みんなからりこう者の与助といわれていました。

ある冬の一日、与助は村の人たちと町へ出ました。そして、彼一人は、酒を飲んで帰るがおくれてしまいました。その日は、いつにないいい天気でありましたうえに、まだ日も

まったく暮れないから、泊まらないで急いで村に帰ろうと思って、いい気持ちで雪路を帰っていききました。

彼は、高原を一人で通るのもそんなにさびしいとは思わなかったのです。真つ赤な夕日は、山に沈みかかつて、ほんのりと余りの炎が雪の上を照らしていました。明日もまた天気とみえて雪の上はもはや幾分か堅くなって凍っています。その上を彼は、さくりさくりと朝きたときの路を歩いて、鼻唄をうたつてきました。

西の方の山々は、幾重にも遠く連なっていて、そのとがった巔が、うす紅い雲一つない空にそびえていました。まったく、あたりはしんとして、なんの声もなかったのです。与助は、だんだん酒の酔いもさめてまいりました。そして、一刻も早く村に帰ろうと思いましたが、このとき、かなたの森の方で、オーオというおおかみの鳴き声を聞きました。彼は、それを聞くと、ぞつとしました。

まだ村の火は見えないか、早く村に入りたいものだ、もしおおかみに見つかったら、食われてしまうだろうと思つて、いっしょうけんめいに歩き出しました。そして、後方を振り返ってみますと、真つ黒な大きなものが、雪を砕いて、こつちにだんだんと迫ってくるのでありました。

与助は、足がすくんでしまいました。そして、もう一步も動くことができなかつたほど、おそれを覚えたのであります。彼は自分の命は助からないものだと思ひました。なぜ、もつと早く帰らなかつたらう。そう思うと酒を飲んだということを後悔しました。みなといつしよに家へ帰つていたら、いまごろは、安樂にいろいろのそばで話をしていられるのだらうと思ひました。けれど、いくら後悔しても、なんの役にもたちませんでした。おおかみは、だんだん彼に迫つてきました。

与助は、心の中で神さまや仏さまに、どうか命を助けてくださるようにと祈りはじめました。すると、おおかみは、もうすぐそこまで近づいて、雪の上を踏み碎く足音すら聞こえたのであります。

与助は、自分の命はないものだときらめました。そして、彼は振り向いて、迫つてきたおおかみに向かつていいました。

「私は死んでもいいが、家には、妻も子供もある。もしおまえが私の命を助けてくれたら、おまえの欲しいものはなんでもやる。家には、にわとりが五羽も六羽もいる。おまえが私を食べてしまわないなら、にわとりを三羽おまえにやるから、どうか私の命を助けてもらいたい。」と頼みました。

与助よすけがこういいますと、おおかみは、ぴたりと雪ゆきの上うえに歩あゆみを止とめました。そして、しばらくじつとして動うごきませんでした。与助よすけは、いつか猫かりゆうと 人ひとのおじいさんが話はなしたことを思おもい出だして、おおかみが情なさけを感じかんじてくれたのではないかと考かんがえました。

彼かれは、なんとなく後うしろ髪がみを引ひかれるような気き持ちがしましたが、おそろおそろ前まえに向むかつて、歩あるき出だしました。すると、おおかみは、まったく彼かれのいっただことを聞ききわけたものとみえて、害がいを加くわえるようすもなく、与助よすけの後あとについて歩あるいてくるのでありました。

与助よすけは、たびたび後あとを振ふり向むいてみるだけの勇ゆう気きもありませんでした。おおかみは彼かれの後うしろ一、二間けんも離はなれて、のそりのそりと、ともをするようにいつてきました。

「家うちへいったら、にわとりを三羽ぼやるぞ。」と、与助よすけは、ちようど念ねん仏ぶつを唱となえるように、おなじことを繰くり返かえしていいながら歩あるきました。

おおかみが彼かれに對たいして、まったくなにもしないということことを悟さとると、彼かれは、心こころでいろいろの考かんがはじめました。

「早はやく、村むらの灯あかり火みが見みえてくれればいい。」と思おもったり、また、

「にわとりを三羽ぼやる約やく束そくをしたが、どのにわとりをやったらいものだろう。」と思おもったりしました。

しかし考えてみると、やるようにわとりはなかつたのです。いずれも去年の秋高い値を出して買ったので、いま、卵をよく産んでいるのであります。それをおおかみにやってしまうのはまったく惜しいことであります。けれど、彼は自分の命には換えられないからと思いましたが。そんなことを考えているうちに、はるかかなたに村の灯火が望まれたのであります。

「家へいったら、にわとりを三羽やるぞ。」と、与助は同じことを口では繰り返していましたが、だんだんにわとりが惜しいという心が前よりも募ってきました。

なにも自分は、おおかみにわとりをやらなければならぬという理由はないはずだ。おおかみが人間の命を取ろうとするのこそまちがっているが、自分がおおかみに、にわとりをやらなければならぬという理由はないであろう。これは、こうしておおかみをだましておいて、村に入ったら大きな声を出して叫べばいい。そうすればみんなが飛び出して、おおかみを殺してくれるからと思いましたが。

彼は、とうとう村に入りました。どの家も、日が暮れてしまつて寒いので戸を閉めていました。与助は思いきつて大きな声を出すことができませんでした。もしまちがったら、おおかみに食い殺されてしまうと思つたからであります。

「家へいったら、にわとりを三羽やるぞ。」と、与助は、やはりいいつづけて歩きました。そして、彼はついに自分の家の戸口に着いたのであります。そのとき、彼はちよつと振り返つてみますと、黒いおおかみは、すこし彼から離れたところにきて立ち止まつていました。

「どれ、家へ入つてから。」と、与助はいつて、戸を開けて躍り込みますと、あわてて後ろ戸をピンと閉めてしまいました。そして、堅く棒をかつて、にわとり小舎の前について、内をのぞいてみますと、六羽のにわとりは、よくふとつて、とまり木に止まつて安らかに眠つていました。

「どうして、このいいにわとりを一羽だつてやれるものか。毎日卵を産んでいるのに。」と、与助は独り言をしました。そして、いくらおおかみが暴れたつて、あのじょうぶな戸を破つて入ることはできない。もしそんなときは、鉄砲も刀もあると考えました。

彼は、それよりおおかみへの約束などはかまわずに家へ上がつて、今日はまず無事でよかつたと喜んで、夕飯の膳に向かつて、酒を飲みはじめたのであります。

彼は、戸の外に立つているおおかみはどうしたろうと思いましたが、まさか開けてみるだけの勇氣もありませんでした。彼がだいぶさかずきを重ねて、いい心持ちになつたこ

ろ、ちようど村はずれの方にあたつて、ものすごいおおかみの鳴き声を聞いたのであります。彼はあまりいい気持ちはしませんせした。

「やはり畜生などというものは知恵のないものだ。とうてい、知恵のある人間には勝てるものでない。」といいました。彼は、明るる日昨日あつた事柄を村の人々に語つて、自分がうまくおおかみをだましてやつたと誇りました。

「人間の命を取ろうなんていうのが、ふらちなんだから、おおかみの約束を破つたつてさしつかえない。」と、与助はいつていました。

「どんなおおかみだつたえ。」と、村の人々は聞きました。

「灰色の大きいおおかみだつた。見たところでは年をとつているおおかみだつた。」と、彼は答えました。

「おともをしてきたのだから、なにかやればよかつたのだ。」と、中にはいったものもありました。

けれど、知恵自慢の与助は、得意そうに笑つて、

「あのとき、鉄砲でズドンと一発打てば、それまでだつたのだ。せめても、こつちが命を助けてやつたのをありがたく思つたがいいのだ。」といいました。

この話を聞いて 獵人のおじいさんは、頭をかしげて、
 「そんなうそをいうもんじやない。おおかみがあだを返さなければいいが。」といいまし
 た。

これを聞いた与助は、おおかみの出るのをおそれて、その後町へいくにも帰るにも、み
 んなといっしょでなければ歩けなかつたのであります。みんなは、それをおもしろがって、
 わざと帰りには、与助を後に残して、さつさときかかりますと、与助は死にも狂いにな
 っ
 つてみんなを呼び止めながら、後を追いかけてきました。そして、いつしか、だれいうと
 なく、りこう者の与助は、「臆病者の与助」と、みんなからあだ名されるようになって
 てしまったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「子ども雑誌」

1920（大正9）年1月

※表題は底本では、「おおかみと人《ひと》」となっています。

※初出時の表題は「狼と人」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：雪森

2013年4月10日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おおかみと人

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>